

「朱漆牡丹紋沈金卓」保存修復報告書

幸喜淳^{*1} 宇保朝輝^{*2} 室瀬和美^{*3} 松本達弥^{*4}

1. はじめに

一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵「朱漆牡丹紋沈金卓」の保存修復処置は、平成29年5月25日から平成30年3月31日にかけて、目白漆芸文化財研究所内の修復室において行われた。以下は修復内容を記録したものである。

なお、監督職員を宇保朝輝とし、主任監督職員を幸喜淳、修復責任者を室瀬和美、修復担当者を松本達弥とした。

2. 名 称

朱漆牡丹紋沈金卓 1基

3. 概 要

長方形の天板に筆返しを設けた卓で、花剣形の脚に低い猫足を付ける。裏面以外の総体は朱漆塗りとし、天板には沈金で牡丹唐草文を描き、地文様として七宝繫文を配する。脚と脚部にも天板と同様の文様を沈金で施す。裏面は黒漆塗りとし、中央部分には朱漆描きで「八使」の文字を記す。

法量： 横62.3 幅33.2 高さ8.4 (cm)

4. 現 状

朱漆塗膜の表面には、経年により埃や汚れが付着し、塗膜が劣化して本来の艶が失われている。縁部分には黒ずんだ箇所が見られる。乾燥による木地収縮の影響で、木地接合部に亀裂が生じており、亀裂は幅の広い部分では3mm程の隙間が開き裏面に貫通している。また亀裂の周辺塗膜は剥離、剥落した部分が多くみられる。背面右側の脚の一部には、打損により木地が欠失した箇所がある。



塗膜表面の汚れ



塗膜の損傷



脚の一部欠失

^{*1} 一般財団法人 沖縄美ら島財団 首里城公園管理部 事業課 調査展示係 係長

^{*2} 一般財団法人 沖縄美ら島財団 首里城公園管理部 事業課 調査展示係 主事

^{*3} 株式会社 目白漆芸文化財研究所 代表取締役 (H29年度現在)

^{*4} 株式会社 目白漆芸文化財研究所 修復技術者

5. 修復方針

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修復に則り、現状保存修復を原則として行うこととする。修復に際しては、充分に事前調査を行い、傷みの現状を確認したうえで修復工程を決定する。また、写真撮影を伴った修復の記録を取り、修復後と比較できるようにし、修復終了後に報告書を作成し提出する。

6. 修復作業

＜修復前撮影・調査記録＞

修復前に、修復後との比較ができるよう写真撮影を行った。また、素地、下地、加飾および現状の傷みを調査記録し、修復作業の工程を確認した。

＜保管による環境適応＞

修復作業に入る前に、環境になじませるため一定温湿度環境で保管し、安定を待った。

＜設置台の製作＞

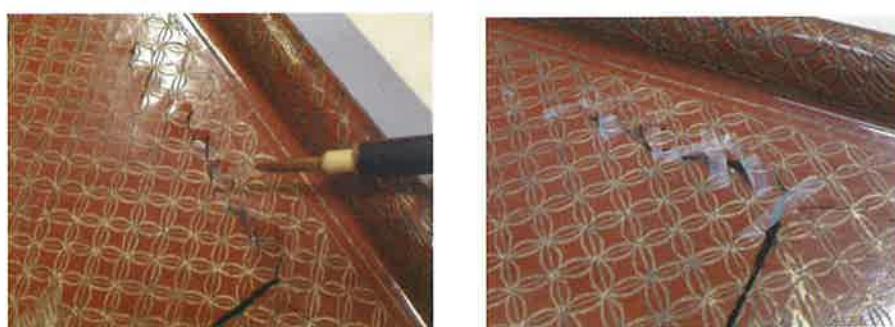
修復作業に入る前に、クリーニングや剥離塗膜の押さえ作業等を安全に行えるよう、設置台の製作を行った。



設置台

＜養生＞

作業中の剥落や損傷を防止するため、亀裂周辺の剥離した部分の養生を行った。養生は薄口雁皮紙を小片に切ったものを生麩糊で貼り、剥離塗膜の保護を行った。



生麩糊にて雁皮紙養生

<クリーニング>

塗膜表面に付着した埃は、剥離した塗膜に損傷を与えないよう毛棒を用いて払い落とした。経年により付着した汚れは純水を僅かに含ませた綿棒で丁寧に除去した。水分で除去できない汚れに対しては、綿棒に少量のエタノールを含ませて除去を行った。剥離した塗膜周辺は、引掛けで塗膜が剥落する恐れがあったため、塗膜の安定処置を行った後にクリーニングを行った。



クリーニング

<亀裂部の麦漆含浸接着>

木地亀裂部分に希釀した麦漆を含浸させ、構造の安定化を図った。天板の貫通した亀裂に関しては、亀裂周辺の朱漆塗膜および沈金部分に麦漆が浸透しないよう、先ず天板面の亀裂部分の堰止めとして、刻苧の充填作業を行った。麦漆に綿状の麻皮の繊維を混ぜ合わせた刻苧を表面から挿し入れて、亀裂に充填した。刻苧が十分硬化した後、裏面の亀裂から接着用の麦漆を溶剤にて希釀し、亀裂部分に含浸した。この際、剥離した塗膜には漆が浸透しないよう配慮し亀裂の接着を行った。亀裂が深いためこの作業を繰り返し行った。



綿状刻苧の充填



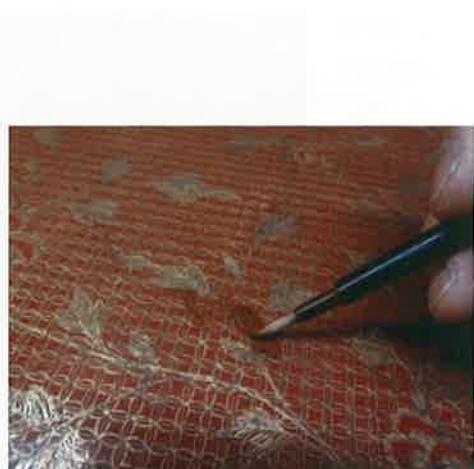
希釀した麦漆含浸

＜剥離塗膜の押さえ＞

天板表面の剥離塗膜の接着作業に際しては、沈金の彫り部分に漆が浸透してしまわないよう、塗膜表面と刻線部に膠を塗布し、漆染みや汚れが生じないよう事前処置を施した。希釈した麦漆を剥離した塗膜の下に含浸し、溶剤の揮発を待った後、より濃度の高い麦漆を挿し入れ、木枠と竹ひごの弾力を利用した心張り法にて圧着した。麦漆を乾固させた後、養生のために塗布した膠は残留の無いよう拭き取った。

反り返った塗膜は、僅かに水分を含ませて少し時間を置き、柔軟性を持たせた後、麦漆を含浸し接着を行った。

また、木地収縮のため塗膜が重なり押さえきれない箇所は、段差の生じないよう塗膜の一部の形状を整えて、貼り戻し作業を行った。塗膜の圧着には竹ひごによる心張り法を採用した。



麦漆の含浸



心張り圧着

＜刻苧充填及び下地付け＞

亀裂部分の隙間や塗膜の欠失した部分には、麦漆に木粉や地の粉を混合した刻苧を充填した。亀裂の深い部分には荒目の木粉や麻の繊維を混ぜ合わせた刻苧を、浅い部分には麦漆に細目の木粉と微粒子の地の粉を混ぜ合わせた刻苧を用いた。乾固後に刻苧面の肌を整え、漆分の多い麦漆に微粒子の地の粉を混ぜた下地を施した。



刻苧の充填

＜欠失部分の復元＞

背面右側の鰐の一部が欠失している部分については、監督職員と協議の結果、形状復元を行う事とした。木地が露出している箇所から、使用された木材は鉾葉樹と判断し、現存する同部分の形状を参考に部材の製作を行った。復元した部材は麦漆で接着し、さらに刻苧を用いて形状を整えた。

＜際処理及び際鋸＞

朱漆塗り面の損傷箇所の際処理については、漆下地を施すと視覚的に目立ってしまうため、膠を用いて際処理を行った。また裏面の黒漆塗膜の際処理については、生正味漆と砥の粉を混ぜ合わせた際鋸を施し、触手による損傷拡大の防止とした。

＜漆固め＞

裏面の黒漆塗膜や際鋸を施した部分の保護と強化のため、漆固めを行った。漆固めは、素黒目漆と生正味漆を調合し溶剤にて希釀して塗布した。塗布した漆は、塗膜表面に残らないよう丁寧に拭き取った。

＜欠損塗膜部分の補彩＞

朱漆塗膜の亀裂や塗膜の欠失部分については、刻苧や漆下地を施したままでは展示上視覚的に黒く目立ってしまうため、監督職員との協議の結果、除去可能な素材を用いて補彩を行うこととなった。まず下付けとして、弁柄を膠で溶いたものを筆で塗布し、乾燥後さらに顔彩を用いて朱漆塗膜の色調に合わせるよう補彩を行った。



補彩

＜修復後撮影・報告書作成＞

修復後の写真撮影を行い、修復記録をまとめ、報告書を作成した。

7. 修復工程

- | | |
|-------------|--------------|
| ①修復前撮影・調査記録 | ⑧刻苧充填及び下地付け |
| ②保管による環境適応 | ⑨欠失部分の復元 |
| ③設置台の製作 | ⑩際処理及び際鋸 |
| ④養生 | ⑪漆固め |
| ⑤クリーニング | ⑫欠損塗膜部分の補彩 |
| ⑥亀裂部の麦漆含浸接着 | ⑬修復後撮影・報告書作成 |
| ⑦剥離塗膜の押さえ | |

朱漆牡丹紋沈金卓 修復前後画像

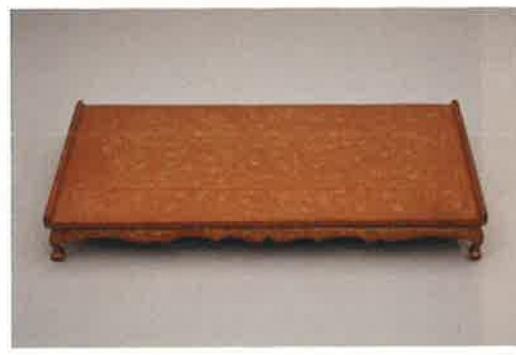
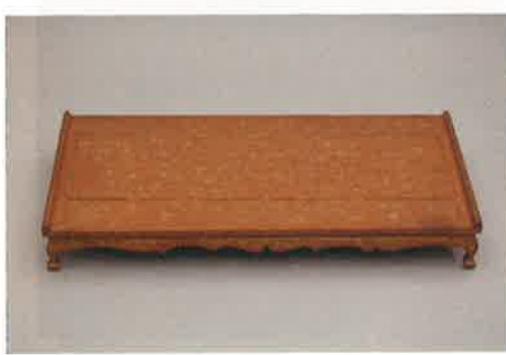
修復前



修復後



全景



正面



天面



裏面

修復前



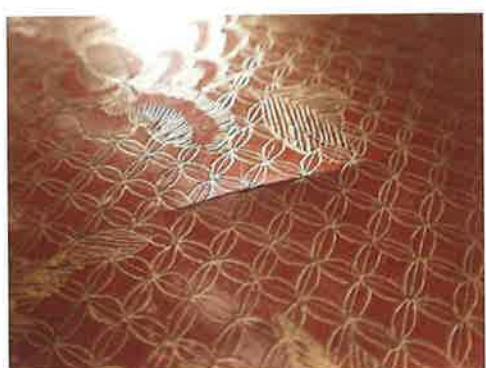
修復後



塗膜表面の汚れ



亀裂、塗膜剥離



塗膜剥離



欠失部分

修復前



修復後



裏面 塗膜剥離



裏面 塗膜剥離



裏面 塗膜剥離



裏面 塗膜剥離